

(4) 指導計画の作成と内容の取扱い

ア 指導計画の作成に当たっては、それまでの学習を基礎に、児童の発達の状態と生活経験等を十分配慮し、指導の目標や内容を適切に設定する。

イ 指導内容の選定に当たっては、一人一人の障害の状態を把握するとともに、他の教科等の中で行われている対人関係や社会生活上の課題との関連を図り、「社会性の学習」で取り組んだ内容を他の場面で般化することを意識した指導をする。

ウ 題材の選定に当たっては、児童の興味・関心のある題材や、それまでにできるようになっていたり、分かっていたりする活動を取り入れていく。ただし、生活年齢を考慮して、年齢に応じた社会生活上の課題を取り上げることも大切である。

エ 社会性の困難さは自閉症の障害特性の一部であることから、改善、克服が難しいということを考慮し、支援の視点からもその軽減を図る。

オ 指導においては、教員集団で協議しながら、最も適切な支援が提供できるように計画、実行、評価、改善を適宜行うようにする。

(東京都都立特別支援学校小学部・中学部 教育課程編成基準・資料より)

ア 「社会性の学習」の対人関係に関する内容では、幼児・児童の社会性の発達が参考になります。しかし、自閉症の児童の発達は、アンバランスで個人差が大きく、また発達の順序が自閉症のない児童とは異なる場合があるので配慮が必要です。このため「社会性の学習」の指導の目標や内容を設定する場合は、自閉症の障害特性に応じ、かつ一人一人の発達の状態や生活年齢等の実態に応じて設定することが重要です。

イ 「社会性の学習」は、自閉症の障害特性に応じた指導を時間を設けて指導を行います。このことを大切にしながら、他の授業との関連を図る必要があります。「社会性の学習」で培った知識・技能、支援の方法を他の学習の場面で、活用・発揮させることも重要です。

ウ 「社会性の学習」の指導内容は、自閉症の児童が苦手な部分に関わる指導です。このため、指導するに当たって、児童が意欲的に自ら学習するように、次のような配慮が必要になります。

- ① 興味・関心が持てる活動を教材とする。
- ② 分かりやすい教材を使用する。
- ③ 児童にとって、分かる評価やフィードバックを丁寧に行う。
- ④ 児童の年齢に応じた課題である。

自閉症の児童の場合は、この興味・関心が持て、分かりやすい教材や児童にとって分かる評価を提供するに当たり、自閉症の障害特性について配慮する必要があります。また、その障害特性を生かした指導も有効です。

例えば、評価の際、自閉症の児童にとって視覚的な支援が分かりやすいことから、課題ができたからお気に入りのキャラクターのシールを升目に沿って貼っていくとか、星とり表を塗っていく等の目に見える支援が効果的です。

また、障害特性を生かした指導として、パズルは、きっちりと隙間なくしっかりとハマるものを使うとか、ぴったりハマる大きさの教材を活用することなどが効果的です。

エ 「社会性の学習」のねらいは、児童が習得する知識や技術だけではありません。自閉症の児童の社会性については、どのような支援をすれば、困難を軽減できるかという視点で支援を開発し、指導することも重要です。例えば、ゲーム等で自分の順番を理解するために、順番表を作成し、その使い方を「社会性の学習」で練習するといった指導は、支援の方法を工夫し、活用していく指導をしていくこととなります。

オ 「社会性の学習」では、児童の実態やねらい、活動によって、一対一の個別指導から集団指導まで様々な指導形態が考えられます。このため、よりよい指導を行っていくためには、教職員の連携が大変重要です。

3 「社会性の学習」の指導形態

「社会性の学習」における指導形態は、次ページの指導形態Ⅰから指導形態Ⅲのような指導形態が考えられます。

指導形態Ⅰは、教師と児童が対面で向き合う個別学習です。これは、教師と具体的なやり取りを通して、児童が他の人との関係をしっかりと形作ることを期待する指導形態です。

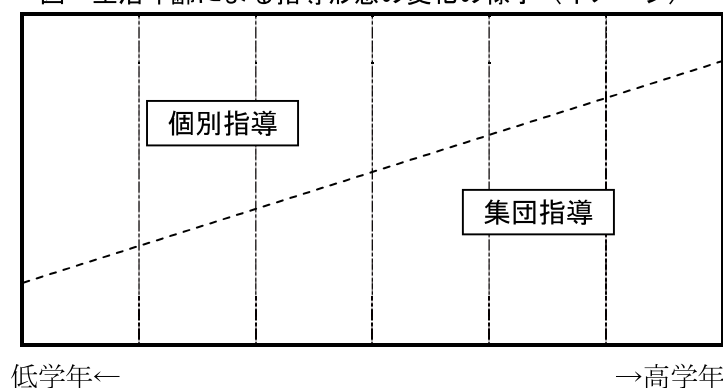
指導形態Ⅱは、教師と2人から3人の児童による小集団の指導です。課題におけるやり取りは、教師と児童で行います。

指導形態Ⅲは、教師と2人から3人の児童による小集団の指導ですが、課題におけるやり取りは、児童同士で行います。

これらの指導形態は、児童の実態、指導内容やねらいに応じて、適切な指導形態は変わってきます。注意すべき点は、指導形態Ⅲは、全ての児童のねらいが同じであるという前提があるということです。

また、指導内容やねらいによっては、このような指導形態が指導の段階として活用される場合もあります。例えば、物の受け渡しをするときに、「どうぞ」「ありがとう」と言えることをねらった学習をするとき、まず、指導形態Ⅰで、教師との学習を進め、次の段階として、指導形態Ⅱ、Ⅲに進むということが考えられます。この場合も、あくまでも同じねらいの児童による指導であることが必要です。さらに、多くの場合、この段階的指導で、児童の学年が進むことによっても変化していくと考えられます。学習を始めたばかりの小学部低学年では主に個別指導（個別の課題学習）を多く行い、基本的な人とのやり取りの基盤を作り重点を置きます。学年が進み、徐々に児童が学習活動に主体的に取り組む度合いが高まることに対応して、個別指導の占める割合が減り、集団指導が増えていくことも考えられます。しかし、画一的な集団指導では、自閉症の児童にとっては学習が困難となるため、一人一人のニーズを活かす多様性のある集団指導を考えていく必要があります。また、課題の難易度やつまずきによっては、個別指導で学習した内容の応用を集団指導で行うなど、適宜適切な指導形態の選択が必要であるといえます。

図 生活年齢による指導形態の変化の様子（イメージ）



また、次の図のように、指導形態の発展として、指導内容やねらいによっては、生活単元学習等の他の学習場面で、「社会性の学習」で学んだ技術等を発揮することも想定できます。

資料 「社会性の学習」における指導形態

指導形態は、児童の実態と指導のねらいに応じて変化する。以下、指導形態の例を示す。

